

《片田 敏孝》氏

「荒ぶる自然災害から犠牲者ゼロを目指す～危機に主体的に備えるために～」

### キーワードは主体性

平成最後の夏、本当に大きな自然災害に見舞われました。7月の豪雨もありましたが、関西でいうならば台風 21 号。実に 25 年ぶりの勢力の強さ、風の強さだったといわれています。地球温暖化により水蒸気量が増え、多雨になる。そして一つひとつの台風が大きくなる。これらの災害がどれだけ甚大な事態をもたらすのか、予想も立てられない状況になってきています。

7月の豪雨では、倉敷の真備地区で 61 人の方が逃げ遅れ等により亡くなるという大変な被害が出ました。この地域では堤防の整備が進む前は 5メートルの浸水は頻繁にあったのですが、治水が進んでからはそのようなこともなくなりました。50センチほど水に浸かった際に、碑を建て地域に教訓として残したのですが、今回はそれを遥かに超える 5メートルの水に浸かり多くの犠牲が出てしまいました。ある意味、教訓が災いにつながった一面もあるわけです。

地球温暖化の影響もあり、これからの気象災害を考えるとどんなことが起こるかわかりません。こうしたらいいなんていえません。そういう状況の中で向き合い方をどうすべきか。

これまでの行政主導のマニュアルによる防災というやり方は、住民から自らがその災害に向き合っているんだという当事者の意識を剥ぎ取っているように思います。

ここに社会の仕組みとして、個人として、何か抜本的に考え直さなければならない問題があるのではないのでしょうか。私は、そのことを考えていくうえで「主体性」という言葉が重要になってくると考えます。

### 行政主導の防災の転換

防災白書によると、1959年の伊勢湾台風の前年までは毎年 1,000人以上、そして伊勢湾台風では 5,000人を超える方が亡くなりました。これほどの死者を毎年出すのは先進国の体をなしていないとして、災害対策基本法を作り、行政は住民を守る責務を有するとして、その法の下で行政主導による防災インフラを整備しました。それにより、阪神淡路大震災と東日本大震災を除き、災害による死者は年間 100人未満に減らしてきました。そのことはよかったわけですが、それが行政主導だったことで、何から何まで役所頼りみたいな感じになってきたように思います。

私は政府の中央防災会議の委員をしており、災害があるたびに報告書を出すのですが、そこで毎回繰り返される「反省」と「対策の積み増し」に個々の内容は正しいと思いながら、防災の主体は行政で行政が住民に避難をお願いするということに違和感を感じることを再三意見してきました。そして今回もその議論がなされていましたが、最終の報告書には、こう書かれていました。「住民主体の防災対策に転換していく必要がある。」と。行政主体の取り組みの根本的な見直しです。「住民は自らの命は自ら守る意識をもって、自らの判断で避難行動をとり、行政はそれを支援する。」そのように書き込んであったわけです。

### みんなで逃げるにはどうしたらいいか

自然にあらがえなかつたら逃げるしかないのです。しかし、いきなり 5メートル浸水するというハザードマップを見せられても誰だって現実感をもって見られないと思います。目の前に危険が迫ってくるまで、その危険

を認めようとはしない「正常化の偏見」もあります。ある意味、それは人間らしいことです。その側面から本当に逃げるにはどうしたらいいかと考えたときに、今の防災行政や専門家の正論だけの論調に違和感を持つわけです。

逃げる際には避難の知識や情報が重要だといわれますが、それがあつたからといって、皆が逃げるわけではありません。決してその方々の防災意識が低いわけでもなく、「違う側面」を考える必要があるのではないかと思うのです。

過去の水害で逃げなかったお年寄りに「（幸い無事だったが）なぜ逃げなかったのか。」と聞いたところ、「逃げたら助かることはわかるが、亡くなった主人と建てた思い出の家を無くしてまで生きようと思わない。避難所についても人に迷惑をかけてしまうだけ。主人が迎えにきたのだと思ってここにいた。」と答えました。そう言われたらその行動・判断を否定することはできません。「あなたが逃げない気持ちも分かる。でも、そんな死に方をしたら東京に住む息子さんが一生悔やむのではないか。」と、私は息子さんの尺度で話をしました。その時、そのお年寄りはハッとした顔で、「そうやな、死んでまで息子にそんな思いをさせちゃいかんもんな。やっぱり逃げるわ。」と言ったのです。母親は子どものことを思ったり、父親は家のことを思ったり、人は人とのつながりの中で大事な人のことを思い、人として逃げられないという側面があります。それをどう克服していくべきか、地域のみんなで逃げるにはどうしたらいいかということを考える必要があります。「逃げない」という思いがなぜ出てくるのか、それを読み解いた上で解を見つけていくという、納得のコミュニケーションがいかに重要かということ強く感じています。

## 釜石のこと

東日本大震災のとき、釜石の子供たちは一生懸命逃げてくれました。何よりも地域のお年寄りたちが、「自分たちが助かる助からんじゃない。津波に向き合うということはこういうことだ。」と、子供たち、孫たちに背中を見せるために避難訓練にも積極的に参加する環境だったからこそ、そういう子供たちが育まれたのだと思います。一人ひとりが自分の「いのち」に責任をもって、（母が子を）迎えにいかなくてもあの子はきっと逃げていると、信頼で結び合ったときに、母と子の「いのち」が守られる。これが「てんでんこ」（※）できるということなのです。人は危うい状況になったときに考えるのは、その人にとって一番大切な人のことです。一人ひとりが出来る限り自分の「いのち」を守るということは、他者の「いのち」を守るということになるのです。防災教育というのは「いのちの教育」なのです。親が子と、祖父母が孫と相互に思い合う中で、一人ひとりが「いのち」を守るということを実効性のある形で考えられるようになるのだと思っています。

※津波が来たら家族のことさえ気にせず「てんでばらばら」に逃げなさいという三陸地方に伝わる言葉

## おわりに

今後、自然はますます荒ぶると思います。これまでの対策を積み増やしていくことを考えていく形から、もう少し人間を見ていくこと、社会を見ていくこと、その上で仕組みを考えていくこと、そして私たち自身も自らの「いのち」を何かに委ねようとしている自分の姿と向き合うことをしない限り、さらなる防災や安全は確保できないのではないかと思います。